

被災地高校での心理支援 その1

～赴任当初の様子～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

季節は巡り、東日本大震災から半年以上が過ぎました。5月から7月まで被災地に滞在しながらの緊急支援が終了した後、継続支援要請が宮城県教育委員会から正式にあり、この9月から気仙沼市内の同高校へ、今度は通いのスタイルで心理支援を続けています。

秋風の吹く今、緊急派遣スクールカウンセラーとして、これまで活動した内容を、特に赴任当初のことを中心に振り返ってみたいと思います。

■被災状況と赴任当初の様子

私が担当した高校は2校ですが、それぞれの被災状況は次の通りです。

A高校は、全生徒数365名。震災により命を落とした生徒は1名、親を失った生徒が6名、避難所から通う生徒は合計22名と聞きました。

校舎が被災により壊滅的ダメージを受けたもう一つのB高校は、3つの専攻科別に、それぞれの生徒が、被災を免れた市内の3つの高校へ、分散して通っていました。私の担当は、赴任校のA高校に間借りした産業経済科の3クラス、生徒数115名でした。

B高校では、2年生1名が遺体で見つかり、入学予定だった1名が行方不明であるということを耳にし、ここでも心が痛みました。そのほか家族や親族、家屋を流された生徒も相当数に上るとのお話でした。

学校のスタートは5月9日。そのほぼ1週間後に緊急派遣スクールカウンセラー（以後SC）として赴任したところ、職員室内はピリピリとした緊張が走り、いわば野戦病院のような臨戦態勢の様相を示していました。疲労の濃い先生方も少なくなく、その張り詰めた空気をなんとか和ませることはできないだろうか、それがまず最初の仕事になるだろうと思案しながら、赴任の挨拶をさせてもらったの

をありありと思い出します。

生徒は一様に屈託ない明るさを呈していました。それは震災という強烈なストレス体験への防衛としての軽躁状態であるかもしれないとの疑いを抱く程、想像していた以上の明るさが、生徒たちにありました。気仙沼での日々を重ねていくうちに、それは、地域性や校風によるところが大きいことが、次第に明らかになる一方、アグレッシブな言動を示す生徒が気になっていきました。

被災状況の程度と、それに対する本人のストレス耐性やソーシャルサポートの差によって、個々の反応行動やあり方も違ってくることから、やはり一人ひとり個別に見ていかないと、生徒たちの本当の姿はわからないだろうという思いは、一貫してありました。

生徒たちとの個別カウンセリングから浮かび上がってきたことは、保護者の方が失職しているという厳しい現実です。気仙沼に広く存在する水産関連会社の多くが津波に流され甚大な損害を受けたことから、やむなく解雇された保護者の方々が、少なくありませんでした。

ある食堂が津波で流され、経営者も高齢であることから店を閉じることになり、長く働いてきた保護者の方が、そこでの職を永久に失ってしまった、というケースがありました。

また、たいへん長く営まれてきた老舗のお菓子屋は、すでに商品を作る職人さんは不在で、採算の合わないまま祖母のプライドだけで閉店せずにやってきたのですが、津波で流されたことによってようやくクローズすることができて安堵した、といったケースも見られました。

見慣れた街並みと同時に、生活の根幹そのものを失ってしまったことをはじめ、この震災によってそれぞれの方々の人生が、大きく揺さぶられていくのです。

<続く>